

---

# 魔法 = 譜学？記憶の先には何がある？

五作

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法＝譜学？記憶の先には何がある？

### 【Zコード】

N1753Y

### 【作者名】

五作

### 【あらすじ】

魔法＝譜学？

記憶を探し右往左往、バトル、笑い、恋愛、シリアルス、何でもござれのストーリー。

彼は果たして記憶を取り戻せるのか？そしてその先には一体何が…？  
なかなかの駄文です（笑）

## 世界観（前書き）

初の投稿です。ぐだぐだ感が否めないかな？

## 世界観

世界には魔法が存在している。

魔法は人々の生活の中心にある

魔法を研究し、使い易くされたのが、譜学と呼ばれる。

魔法＝譜学といつ意識が一般常識とされている。

譜学には一～三までありそれぞれ呼び方ある。

一般的には第一譜学 “詩学”  
シガク

冒險者には第二譜学 “調”  
シナヘイ

国家間には第三譜学 “与”  
ウツシ  
と呼ばれる。

いる。

冒險者の第一譜学 “調” には色々種類が派生していく今でも増えて

いる。

この物語りは、一人の譜学術師による記憶を探す物語である。

## 世界観（後書き）

こんな感じですか？暇があれば投稿します。

## プロローグ（前書き）

一部変更しました

## プロローグ

・とある国にて・

「ふああ～、ああ～眠つ」

大きな欠伸をしながら青年は歩いていた。

「此処にも情報は無しか、はあ～、いつになつたら会えるんだろう？」

彼はぼんやりと考えながら空を見上げて言つた

「僕の　　の手がかりの人は……」

・とある南方の国にて・

「まだ見つからないのか……」

「はい、四愧死に探すようにいついていますが、未だに成果は現れて

「 いな よう です …… 」

「 一 体 何 处 に い る の だ …… 私 の …… は …… 」

「 主 様 、 私 も 捜 索 に む か い ま す 。 ア イ ツ の こ と は 我々 に 任 せ て 主 様 は 一 刻 も 早 く …… を 取 り 戻 し 下 さ い ま せ 。 」

「 あ あ 、 分 か っ て い る 。 ヤ ツ の 「 こ と は お 前 た ち に 任 せ る ザ …… 」 、 私 は 少 し 眠 る 。 後 は 頼 ん だ 。 」

「 承 知 」

そ う こ う て 二 人 の 会 話 は 終 わ り 、 残 つ た ほ う は 上 を 見 上 げ

「 一 刻 も 早 く …… を 取 り 戻 し 、 ヤ ツ を 見 つ け な か れ ば …… 全 く 一 体 何 处 に い る ん だ …… 始 ま り の d o l l e は …… 」

そ う こ う て ゆ つ た り と 田 を 閉 じ た 。

## プロローグ（後書き）

プロローグなのにいきなり確信になりつつある。

文才が欲しい

第一話～出でこと依頼～（前書き）

取り敢えず第一話です。

## 第一話～出会いと依頼～

北部大陸の一一番端アルトーといつ国の冒険者ギルドに一人の男がいた。

一人はアレス・エクステルといい、つり目で、明らかに怒っている。もう一人はダルク・ライウムといつ名で、大男な風体なのに、縮こまり怒られていた。

「このバカ！誰が報奨金の全てを貴様に一任すると言つたんだ！私は貴様に預けると言つたはずだ！」

「だから悪かつたつて～ぱくぱく…この通りさ～もぐもぐ…」

お分かりかもしれないが一方は怒り、もう一方は食べながら謝る。その結果…

「……殺す」

となるわけで、

「戦略的撤退…！」

「待て…ゴラア…」

といつも通りの追いかけつこという展開になつてしまつのだ。周りの人達は「ああ…またか…」と思い、挙げ句の果てにどっちが勝つのかをかける始末。

彼らの母ができるまで続くのだった。その後、母親同士による醜い息子自慢の抗争に巻き込まれ、ボロ雑巾の様になることは知る由も無

いのだれい。

次の日、二人はいつものように冒険者ギルドに行き、依頼を物色し始めた。

運悪くその日は依頼が少なく、数枚位しかなく諦めようとしていた時、ある一枚の依頼書が目に止まった。その依頼はいつもの短期の物とは違い、

”帝都まで護衛してくれる人を募集”

というものだつた。一人はその依頼が気になり、受領してしまつたのだ。

詳しい内容は合流してから話すといわれ、気にはなつたが、取り敢えず準備をして東門前に向かうこととした。

集合の時間まで後四時間程であつた。

待ち合わせの時間となり、一人は東門前に向かうと紅髪で藍色の瞳を持つた青年がいた。

青年はこちらに気がつくと駆け足で一人の元によつて来ると、息を整えて発した。

「すいません、失礼ですがもしかしてあなた方が帝都まで護衛してくれる方ですか？」

二人は少し動搖したが、すぐに

「ああ、そうだ。俺達があんたの依頼を受ける者だ。俺の名はダルク、こっちの目つきの悪いほうがアレスツーんだ。よろしくな。んで、あんたの名前は？」

「ああ、これは失礼しました。自分の名はマルク、マルク・ウェストールと申します。以後お見知りおきを。」

## 第一話～出会いと依頼～（後書き）

主人公登場！！！といつても一番最後、少しだけです。次回は主人公とアレス、ダルクの紹介です。

## 人物紹介（前書き）

前回の登場人物の紹介です。

## 人物紹介

主人公

マルク・ウェストール

性別：男

年齢：16

職業：譜学術師

性格：冷静だが考え過ぎて暴走することもまままち

詳細：既に滅んでしまったと噂されている譜学術師の末裔。彼には沢山の秘密が……。

アレス・エクステル

性別：男

年齢：17

職業：剣士

性格：無関心。だが小さくて可愛い物をみると壊れる（笑）

詳細：マルクの親友、感情を表に出すことが苦手。

マルク・ライウム

性別：男

年齢：17

職業：弓兵

性格：大らか、しかしとてつもない馬鹿。超絶馬鹿。

詳細：アレスの親友、友をバカにされるとキレる猪。

## 人物紹介（後書き）

次回主人公の旅の理由が明らかに……！！

## 第一話～旅の理由～（前書き）

更新遅くてスイマセン。

今回は、ギャグ多めです。つーか、会話多め！？

## 第一話～旅の理由～

「取り敢えずお互に自己紹介も終わりましたし、依頼の内容についてお話ししましょうか」

「ああ、頼むわ。

依頼には内容を聞いてから受領するかどうかを決める。でいいんだよな？んじゃ早速聞かしちゃあくれねえか？」

「はい、分かりました。  
えと、そちらの方も宜しいでしょうか？」

「……好きにしろ。  
基本的には聞き役だからな。  
そこに居る馬鹿はおそらく、結果だけいって理解するだろ？が、俺  
は違う。  
すまないが説明を頼む。」

「はあ…分かりました。  
ではお一方の了承も得られたことですし、依頼内容について話します。  
今回の依頼内容はクエストボードにも書きました通り、帝都ラムム  
までの護衛をしてもらいます。

報酬は一回に分けます。」

「一回?それはどうこうつけたあ?」

「先に報酬金額の半分を貴男方に払い、依頼達成後にもう半分を払います。

勿論旅の資金は事前に此方から支払います故」

「何か面倒くせえ払い方だな、依頼達成後に全部払うでいいのによ?」

「まあ、これが自分のやり方ですしね……」

「まあいいや、んでこくらなんだ?」

「前払いでの金賃八枚です。」

「何!?.金賃八枚だと!?」

「アレ?足りませんでしたか?  
ではもう少し上乗せして……」

「待て待て！いくらなんでも多すぎだろ！？

普通の護衛依頼でも、達成して金貨一~三枚程度だぞ！？

どんだけ常識外れなんだよ！？」

「常識外れと申されましても……まだ仕事内容は『ぞこまわし』……

「……追加で仕事を要求する……だからその値段ではないのか？」

「はいその通りです、アレスさん。  
仕事の追加で人探しを行つてほしいんです。」

「人捜しか……それでも多いな……。  
条件が厳しいのか？」

「はい、その通りです。特徴が少な過ぎなのです。  
青髪の青年で特殊な武器を使います。  
彼が使うのは”糸”や”鋼糸”です。」

「”糸”と”鋼糸”？それはまた特殊な武器を使うな……。  
しかし何故その青年を捜すのだ？  
何か因縁でもあるというのか？」

「…………」

「……話せないのか？」

「……分かりました。

この事を初対面のあなた方に話すのは気が引けますが、依頼を詳しく知つて戴くには、致し方ありませんね……。  
しかしこの話を聞いたら依頼を断ることは出来なくなります……。  
それでも宜しいでしょうか？」

「……成る程。

聞いて否応なしに連れて行かれるか、聞かずに考えるか、か。  
それ程までに重い話なのだな……。」

マルクははつきりと頷いた。

「やうだな……、貴様はどうしだい? ダルク」

「やつと聞いてくれたなー俺でもずっと無視されると結構傷つくんだぜー?」

つこさつきまで俺が話してたのに、何時の間にかお前さんの独壇場だよー?」

……え!? 何この空氣? ! 何その意外そうな顔! ?

すつごい心外なんですけど!

傷つくなから、本当に傷つくなからそろそろ止めてくれない(泣)。ぐれるぞこの野

「いいから早く話せ、時間が惜しい。どうするんだ?」

「スマセン。お願いですから最後まで喋らせて下さい……」(泣)

「で? ビジしたいんだ? 超絶馬鹿。」

「ちょっと待つてー? 超絶馬鹿つて何ー? 取り敢えず説明を

「いいから早くしろ、超絶馬鹿。」

「はい、分かりました……(泣)」

ダルクは氣を整えて

「コホン……取り敢えず聞いても良いんじゃ ないか?」

依頼を受けても、どうせ捜すんだろ？

その後のことは……まあ、なんとかなんだろ。」

怪訝そうな顔でダルクを見ながら

「何故そう思える…？」

「どや顔で

「勘

といへ

アレスは呆れ顔で

「流石超絶馬鹿だな。」と納得した

「いい加減本気で泣きたくなつて着たぞ…………」じんあくしお――――――

「取り敢えず超絶馬鹿は置いといて話を聞かせてくれないか？」ダルク

「おいいいっ！？ちょっと待て！今俺を変な呼び方で呼

「いいから、黙つてろ」

「いいよいいよ、いじけてやる……」

と言つて端っこの方で膝を抱えながらいじけだした。

マルクはそれをみながら

「えと…あの…そちらの方は放つておいて宜しいのでしょうか? 流石にそのままと書つのは不憫な気がするのですが……」

「放つておいて構わない。どうせ超絶馬鹿だ、詳しい事を聞いても理解しないからな。後で結果を教えればすむ話だ。」

と我関せざといつた雰囲氣で言った

「はあ…分かりました。」ホン…それではなします。」

「端的にぶつちやけると血分は記憶が無いんです……と、いつても

7、8年前からの記憶ですが、ね。」

と、彼は思いつゝつ聞を空けて言った

## 第一話～旅の理由～（後書き）

まさかの主人公、記憶喪失！次回遂に明らかに…！…（何が？）  
にしてもダルクは馬鹿ですね～。ほとんどの確率でいじられます（笑）

## 第二話～記憶～（前書き）

アレスのキャラが壊れます（汗）

こんなアレスじゃないよ～（泣）

シーン……

二人の空気が凍つた。

アレスは一言

「え？」

「はい？なんですか？」

「スマン、もう一回いづけど、  
え？どうこうことだ？」

「え？ どうしていつもおましてもそのままの意味なのですが……なんか？」

アレスは表情は普通であったが、内心軽く混乱していた

（え？ 何この反応？ え？ え？ 俺が間違ってるのか？ 家族とか恋人が殺されたとか勝手に予想してたのに、斜め上をいく答えが出てきたし、予想とは絆もしない。いや、普通に考えたら俺が悪いのは解るよ。

でもあれだけ伸ばしといて、7、8年前の記憶がないってそれだけかよっ！？

俺なんかそれぐらい前の記憶だつたら完璧に想い出せないよっ！？ つーかそれそんなに重要なのか？ ああーもひ訳わかんねー！）

若干キャラが壊れつつも、物凄く混乱していた。

それでも何とか続きを聞こうとしたが、「まあ、記憶が無くても平気っちゃ平気なんですね……（笑）」

それを聞いた途端物凄い速さで

「じゃあ、探さなくてもいいじゃんかよっ……」

とつに壊れてしまった。

「何だよそれ！？何なんだよそれ！？別に7、8年前の記憶だつたら別に無くても大丈夫だろ！？本当に、捜す必要あんのか、それ！」

？

「え……えと……あの……？」

「大体（笑）ってなんだよ！？そんなんだつたら捜す必要マジで無いだろ！？」

違うか？俺何が間違つたこといつてるか？」

「はあ……えと……アレス……さん？」

「ああ～スマン、コイツパニクつたらキャラ壊れるんだよ。だから少し待つてくれないか？」

「え……ええ……構いませんけど……」

「待て、ダルク！まだコイツには言いたい事が沢山あるん

」

「まあ、いいからいいから。

取り敢えず一いち来て落ち着け、な? 「

青年たち移動中

「んんっ! すまない、少し取り乱してしまった。」

「少しふてどこかよ? 思いつきつて動搖してたじやん?」

「五月蠅い。黙れ。隅つこでいじけてる。」

「はいはい。わかりましたよ。

スマンな、マルクさん。話の続きをどうぞ」

「えつと……あ……は……分かりました。あ、後自分の事はマルクで結構ですよ。」

「応、わかったよ。マルク。そんじや話の続きを頼むわ。」

「はー。えと、どいまではなしましたっけ?」

ズルツ（転ぶ音）

「ああ（汗）、確かに記憶の話をして別に平氣とかいつてたな。」

「ああ、その辺でしたね。お一方には自分の職業をまだ言つてませんでしたね。」

「もう言えれば聞いてないな。一体何なんだ？」

「はい。自分は譜学術師です。」

「譜学術師？ とは一体どういったものなんだ？」

「言ひなれば、魔法使いの延長線の職業で、術式が倍以上難しいんですね。」

「ふーん、アレス？ どうしたんだ？」

「お前、解らないのか？！」

「魔法は譜学から派生したものなんだぞ！ ！ それを使いこなす彼は凄いことなんだぞ！ ？」

「もうなのか？」

「ああ、魔法と呼ばれる前の呼称は知っているよな？」

「いくら何でもそれぐらい知ってるぜ。楽譜だの？」

「…………譜学だ。」

「や、やつぞ。譜学だ、や、それぐらい、し、知ってるよ。」

「…………もつこい、お前に聞いた俺が阿呆だった。」

「や、そんなこと無いだろ！？知らない奴だつてきつといる　　「  
もついい、話を進めるぞ」　　はい。そうですね。（泣）」

「魔法使い」と言つのは、譜学を簡単にして、誰でも使えるようにした代物だ。

しかし、譜学とは人の手を一切つけず、詠唱も長い。さらには魔法以上の術式を理解し、並大抵の努力や勉強では身に付かないらしい。好き好んで使う奴はよつぼどの変人か自分の力に確固たる自信がある奴。

何らかの理由で魔法を使うのを嫌う奴しか使わん……と聞いたことがあるのだが、マルク、貴様はどれだ？」

「自分はどの部類に入るのでしょうか？恐らく変人にはいるのかな？記憶無いですし……」

「いや、解らんがな。」

「まあ、それは追々追求するとして、先程言つたとおり、自分は譜学術師です。といつても詠唱なんて覚えていませんけどね。」

「それはありえんだろ。魔法も譜学も詠唱無くしては使えんぞ……いや、まさか……詠唱破棄が使えるのか！？」

「いいえ、使えませんよ。自分は媒体を使います。」

「媒体……？そんなものが存在するのか？」

「それは自分が持つこの魔術書です。いえ、正確には譜学書ですけどね。正式名称はわかりませんがこの本の名前は”ワインディールの譜学書”と呼んでいます。」

「譜学書だと？魔術書のようなものなのか？それに呼んでいふとは一体……？」

「まあ、同じようなものと思つていて下れ。書かれている文字は恐らく古代文字ですから断定は出来ませんけど……」

「少し待てー今あつれつと大変な事を言わなかつたか? つーかもう驚く事に疲れた。」

「……? 話を続けますよ? 呼ばれていふと言つのは、著作者が複数いて、この”ヴァインティール”というのが一番多いのです。そして一番謎なのがこの文字、”自分しかよめない”と云ふことなのです。」

## 第二話～記憶～（後書き）

今回で彼の謎が見え隠れします。

やはりダルクは馬鹿です（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1753y/>

魔法＝譜学？記憶の先には何がある？

2011年11月29日20時51分発行